

事例4 トイレを済ませた日は登校できるD男(小学5年生)

欠席等の様子

1年 18日 入学時より不登校傾向があり、母親が学校まで送る。  
2年 9日  
3年 6日  
4年 2日 欠席日数は、学年を上げるにつれて減ったが、朝起きにくい状態が継続した。  
5年 29日 (遅刻78日)  
2学期当初から、起きづらく、頭痛などの身体症状で欠席や遅刻が増加した。

学習の様子

[図形・数] 計算の理解に時間がかかる。  
見取り図・展開図の理解が難しくコンパスなどでの作図が苦手である。空間概念の把握が不十分である。文章題の場面理解が難しい。  
[言語] 話し合いについていけないことがある。言葉が不正確なことも多い。読み間違いが多く、文章の理解が難しい。文字が乱雑になりがちで文章表記が困難である。  
[体育] 運動は得意である。

性格や行動の様子・エピソードなど

保育園年長時に、語彙が大変少ないため発達相談を受ける。発達に大きな遅れはないが、言葉のやりとりの面に気がかりな点があると指摘された。母親のかかわり方について助言があった。

(1年)いつもニコニコしているが、読み、書き、計算の理解等に時間がかかる。

(2年)気に入らないとすねる。

(3年)表現することに抵抗が見られた。他の児童にとがめられるとすぐに泣き、自分の思いを言えない。

(4年)言葉での自己主張がほとんどなく、周囲の動きについていだけで一人で行動できなかった。

(5年)思いを言葉で表す力が徐々につく。

(同 1学期)大便を教室で失敗した。

状況判断がつきにくく、考え方が幼い。困っても黙ったままで解決できない。

気の合う友達といても、やりとりがほとんどなく、言われたとおりに行動する。

苦手なこと、やりたくないことはほとんどしない。

家庭では自己中心的で、極端に少食・偏食である。

児童の理解

自分から要求することが少なく、一人遊びも多いD男に対して、母親もまたかかわりをあまりもたない母子関係が幼少時から形成された。表現や社会性の未熟さは、それが背景にあり、学齢期に至って低学年時からの不登校傾向として現れたと考えられる。

援助・指導の方針

- 1 自己存在感をもたせ、社会性の育成を図る。
- 2 D男へのかかわり方について、両親との連携を図る。

不登校当初 (5年2学期)	・起床しにくいことや頭痛などの身体症状(午後には回復)で欠席が続いた。 保護者面談を実施した。
母親との連携	・母親が安定してかかわれるように、ともに考えるという受容的な態度で話し合い励ます。(D男の思いを受け止めること、強い登校刺激を控えること、遅刻してもよいことなど) 1週間後母親と登校。母親へのスキンシップ要求が現れる。トイレを済ませた日は登校できる。 数か月間、中間休みや昼休み後に登校した。土曜日は、給食がなく、排便を気にせずすむためか、朝から登校することが多かった。
(同3学期)	・遅刻しても、放課後は元気なD男へのいたずらや批判が増える。
学級指導	遅刻登校の理解について学級指導を行う。
個別指導	・一斉授業の中で、個別指導の時間をもち、苦手な部分の習熟を図る。 ・良いところや頑張りを認め、自己存在感をもたせる。
父親の協力	・母親だけでなく、父親にもかかわり方について話し合い、協力を求めた。 母親任せだった父親もD男を起こしてから出勤するようになった。
卒業生を送る会をめざして	・仲の良い児童とともに卒業生を送る会のスタッフとして、当日まで頑張ろうという目標をもたせることにより、朝から登校できるようになってきた。 表情も明るくなり、他の児童とのかかわりも改善し始め、少しずつ思いが言えるようになってきた。

### 変化と課題

#### 1 変化

対人関係	気持ちがりラックスしていると、他の児童と会話ができるようになった。
学習	個別課題の学習にも意欲的に取り組む場面が増えた。
家庭	父親がかかわり始めてから、ほぼ毎日、朝から登校できるようになった。 両親が協力しあうことの必要性が理解され、母親だけでなく父親とのふれあいも増えた。

#### 2 課題

仲の良い児童の間では比較的表情も明るいですが、他の児童とのやりとりには硬さがある。

### 考察

母親のかかわり方を改善し、父親の協力も得て、緩やかな登校刺激を積み重ね不登校傾向を脱した事例である。学級指導による周囲の理解も含め、自己有能感に留意した個別的援助・指導も進められた。しかし、D男が確固とした自己存在感をもつに至っていないとはいえず、社会性の育成について長期的な見通しも踏まえて取り組む必要がある。

**D男は今** 中学1年生。時々休んだり遅刻や早退を繰り返し、登校しぶりを克服できてはいない。

